

中学時代の原風景

梶間俊男

家の中で日々ソファ―に座っている眼の前に一枚の色紙に枯れた風景画がある。

それは、小生の小学校時代の四年生までの親友の父親（日本画家）が描いたものである。彼は父親の死後、母親とその故郷の長崎に転校していった。この色紙を見ていると小学校時代のことが、正に原風景（画は新河岸川―旧荒川―をへだて藁葺きの大きな農家が雪をかぶっている）としていろいろのことが思い出され、のどかな時代が懐かしくなる。やがて、戦争の時代となるが、すでに日中事変は始まっており子供心により大きな戦争の到来を予感していたように思う。

昭和十六年四月、なんとか城北中学校に入学できたが、今考えても中学時代は本当に苦難の時代であった。しかし、今でも中学に入学した時の気持ちは忘れることはない。子供心に中学生になったことは大人の仲間入りをしたという誇りと自負心でいっぱいだったことである。今考えると、十二歳の少年に大人の世界が判るはずがないのであるが、当時はそのように思えたし、また社会人として恥ずかしいことはするまいと考えていた。

そして、十二月八日、寒い曇った日であった。

当時学校校舎は市ヶ谷にあり、当日も自宅のある板橋から市ヶ谷へ、赤羽線、山手線、中央線と乗り継いで、午前七時半市ヶ谷駅に着いた。

丁度その時ラジオ（駅のマイクかも）で日本が米、英に宣戦布告したことが報じられた。駅を出て堀をわたり左内坂をのぼり学校につくまでの間、小生は体の震えるのが止まらなかつた。（戦争に勝てるのか、これは大変なことになった！！）しかし、その恐怖感はやがてその後の大本営発表による過大な戦果の報道で十二歳の少年の心をすっかり楽天的なものに変えさせてしまった。多分一般の人達も似たような心情ではなかつたかと推察される。

入学時にさかのぼるが最初に配布された教科書は小学校時代のそれとは違い、国語、漢文、修身等は和綴じの如何にも書物という感じで大変興味をそそられたことを覚えている。数学、物理、化学、生物、地理、歴史等の教科書の装丁は殆んど記憶がない。しかしすべてが新鮮であつ

た。但し英語のそれはやはり立派なものであったが、授業には苦しめられたし成績は極めて悪かった。多分、己の不勉強を棚にあげ、米英を常に批判するラジオ、新聞等メディアの影響で、英語に対する軽蔑と自分に都合がよいような解釈で極めて不勉強になっていたことである。しかしそのつけがやがて、現在まで及ぼうとは当時は考えもつかなかった。それにもまして、同時に入学してきた同級生の実に豊富な知識を持っていることに脅威を感じたことである。

昭和十七年は、四月米軍艦載機（B25）の襲来があったのみで、不安な中にもそれなりに楽しい月日を過ごした。夏には山梨県の遠縁の家で夏休みを過ごした。小生にとって、夏は戦前、戦後、現在まで最も楽しいものであった。当時のその家の当主は軍医としてすでに出征しており（彼は十八年ごろよりラバウルの陸軍病院の院長として、帰国は昭和二四年）広い家には女三人の所帯、子供とはいえ男はもてた（？）。そしてその家には当時としては珍しいピアノがあったことは、小生の生涯の趣味を決定づけたようである。小生は音楽が好きである。後年吾々の同級生であった三部君にはモーツァルトを啓発されたが、その原点はあのピアノであったと思う。

さて、十七年には一時学校が下赤塚の小学校に間借りしたことがあった。また、勤労奉仕として上板橋の当初予定されていた学校建設予定地（現城北中央公園）の整地作業、また板橋志村の凸版印刷に行ったのもこの年ではなかったかと思う。相変わらず市ヶ谷の校舎に行ったときには時々その帰りに神保町の古書店へ「虎の巻」を探しにうろうろしたことも楽しいことの一つとして憶えている。

昭和十八年は戦局もわれわれの生活も大きな節目であった。学生生活も急速に変わったし、その日常は勤労奉仕の労働が主となり、勉強は従となったように思う一方家庭の日常生活は特に急速に食料が逼迫してきたことである。そして、郊外に買い出しに行き、惨めな思いを味わった年でもある。勤労奉仕も凸版印刷、日本重工（板橋前野町）へと変わり、年配のおじさんに親切にもらったこと等、また相変わらずの大本営の過大な戦果報道を半ば信じ、半ば疑いつつ、学校では粗悪な装丁の教科書に振り回され、貧相な服装で授業に臨んだ。また、体育、教練の時間が増えたのもこの頃ではなかったか。ただ嬉しかったことは、この年に本校舎が現在の位置に木造ではあるが新校舎として出来たことである。

(このあたりの記憶は間違っているかもしれない)。

しかし、その後の記憶は勉強よりも体が弱かった両親に代わり、一人っ子の小生が食料調達に歩き回っていたように思うし、それが生活の中心になった。遂には冬休みを利用し、昭和十九年正月に母の故郷である宮城県栗原の田舎に米をとりに行った。当時、上野から東北本線一ノ関までは十四―十五時間がかかった。その後、この作業は年三回ぐらい二十一年の正月まで続けた。当時ヤミ米の取り締まり等で経済警察が光らせていたが、一度も捕まることはなかった。

不幸だったのは、突然中学の卒業が一年繰り上がり昭和二十年三月になったこと。

米軍の爆撃が昼夜を問わず烈しくなり、二十年三月九―十日には吾々の学友である山田 篤君(予科士官学校入学が決まっていた)もその犠牲になった。今でも彼の姿は忘れられない。

そして三月末には吾々も卒業。小生は残念ながら上級学校はすべて不合格。しかしあまり気落ちしなかった。呑気なのである。この呑気な性格はある意味、小生をずいぶんと救ってくれたように思う。

四月に入り、たまたま隣の医者に風邪と思つて行ったところ、結核の初期症状である肺浸潤という診断を受け、以後、東京と宮城県を行ったり来たり、その間、予備校にも行った。暗い気分の時もあったが、今はすべてが懐かしく思い出される。東京にいる時は配給制度に従つて、今では考えられない粗悪な食品を買い、食していた。

今でも絶対忘れられないこととしては、犬の餌にもならないような雑炊を一日分ずつ、二、三時間並んで買うこと、並んでいる人達は余り口をきかず、その惨めな気持ち、売る人の何か横柄な態度は己の惨めな心と重ね、その屈辱感は恐らく死ぬまで忘れることはないであろう。

しかし、昭和二十年八月、六日と九日に広島と長崎に原爆の投下、そして十五日終戦を迎えた。開戦の時と違い、十五日は本当にすばらしい晴天でたいへん暑かったと記憶している。正に戦争に終始した中学時代であったが、歳月が経つのは有難いことで、多分六十歳を過ぎたころか

市ヶ谷の校舎で習った、ある漢詩を思い出すようになり、今でも時々それを頭に浮かべ、八五歳の現在を味わっている昨今である。その詩は

(もし間違っていたらご容赦を)

少年易老学難成 一寸光陰不可輕
未覚池塘春草夢 階前梧葉已秋声

小生は正にこの詩の通りの人生であったこと、慶ぶべきか、今では口マンさえ感じる。終わりになったが、小学四年生の時に別れ、長崎に転校した、冒頭に書いた画家の息子とは戦後も季節毎の便り、その他のやりとりもあったが、昭和二十七年の年賀状を最後にとだえた。当時原爆の後遺症で小生は大学時代の友人三人を失っている。止むをえぬ戦争ではあったろうが、その代価は誠に大きい。